

式子内親王歌にみる「夢」について

難波宏彰

一

二条院讃岐、俊成卿女、宮内卿と並んで、新古今時代を代表する女流歌人式子内親王は、「忍ぶる恋」の歌人として新古今時代の最も優れた女流歌人であることは周知のとおりである。その式子内親王を象徴する歌が、

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることのよわりもぞする

である。この歌から見える式子内親王の印象というのは、激しい恋を胸に秘めながらも決してもらすことのない相当心の強いものである。そうした激しい恋の中で生きてきた印象を強く与えている式子内親王であるから、当然、恋を素材にして多くの歌が詠まれている。その中でも式子内親王の特徴として、『万葉集』以来恋歌の中で頻繁に詠まれることとなる「夢」の語を使った秀歌が多く存在していることが指摘されてきた。⁽¹⁾しかし、式子内親王の詠んだ歌は十七首と以外に少ない。そうした数少ない中で、式子内親王は、春、夏、秋、冬の四季の歌の中で、また、雑歌、釈教歌の中でと、恋歌にど

どまらず多方面にわたり「夢」を歌に詠みこんでいる。

式子内親王の生きた時代は、貴族社会が崩壊し、平家の台頭そして源平の戦と激動の時代であった。また賀茂斎院という特殊な身分であった式子内親王は、どんな「夢」を紡ぎだそうとしていたのか、式子内親王とともに彼女の「夢」を中心に論をすすめていきたい。

二 式子内親王の出生

式子内親王の「夢」にふれる前に、まず、式子内親王の出生について見ておく。式子内親王の生年は、『和歌文学大辞典』（担当、八島長寿氏）『日本古典文学大辞典』（担当、森本元子氏）『和歌大辞典』（担当、赤羽淑氏）『和歌文学辞典』（有吉保氏編）をはじめ様々な書物で未詳とされてきたがその生年が判明した。陽明叢書記録文書編⁵『人車記 四』（昭和六十二年四月）の嘉応元年（一一六九）七月二十四日条裏書に、「□斎王、高倉三位腹、御年廿一」とあり、このことから出生が久安五年（一一四九）であることが上横手雅敬氏の研究によって判明したのである。この報告が、国文学関係の刊行物とはあまり関係がなかったためか、その存在が認識されるまでに少し時間を要したようである。現在では、式子内親王の生年は、国文学界の常識となりつつある。また、式子内親王の生年については、糸賀きみ江氏、兼築信行氏、石川泰水氏によって上横手説が継承されている。⁽²⁾

このことから兄弟姉妹の関係を考え直すと、従来、殷富門院亮子、守覚法親王、以仁王、式子内親王、休子内親王、好子内親王の順で考えられ、式子内親王は、以仁王の妹と考えられてきたが、姉であることもわかった。

式子内親王は、久安五年（一一四九）に生まれた後、平治元年（一一五九）賀茂の斎院に卜定、嘉応元年（一一六九）病により退下。以後は、萱御所、大炊御門殿などに住み、建久五年（一一九四）頃出家。その生涯は明らかでない点が多

く、橘兼仲夫婦の陰謀事件に關係したとする『皇帝紀抄』建久八年（一一九七）の条

三月之比、藏人大夫橘兼仲並妻女依謀計事被配流国々又一心房上人觀心依同意被召禁武士許前齋院式子内親王同意此事三間不可座洛中之由雖沙汰有議被止了

の記事や、謡曲「定家葛」の説話も真偽のほどは不明であるが、父母兄弟姉妹に相次いで死別、他との交渉の跡もほとんど認められないことから孤独な生涯であったことが想像される。そうした式子内親王の心には、どんな「夢」が紡ぎだされていたのであろうか。

三 『万葉集』にみる夢

式子内親王の「夢」を考察するにあたって、「夢」は物語、和歌など種々の場面に登場しているが、ここでは、まず手始めに『万葉集』の「夢」を見ることにする。

『万葉集』では「夢」を「いめ」と訓んでいる、用字例は九十九、歌数は、九十八首ある。この九十八首が『万葉集』の巻の中でどのように分布をしているか。

『万葉集』の「夢」のみえる巻

卷二	二首	○卷十一	十九首
○卷四	二十一首	○卷十二	二十五首
卷五	三首	卷十三	五首
卷七	三首	卷十四	一首
卷八	一首	卷十五	六首

卷九 二首 卷十七 七首

卷十 二首 卷十九 一首

右の表に示したように卷二、卷四、卷五、卷七、卷十五、卷十七、卷十九、と「夢」は『万葉集』中に広範囲に分布している。ここで注目すべきは資料に○を付けた卷四、十一、十二に「夢」が多く分布している点である。この卷四、十一、十二には、「恋」を主題に詠まれた歌が比較的多いことも注意すべきことである。「夢」が「恋」の中でどのくらい詠まれているのか。「夢」歌九十九首中「夢」が「恋」に詠まれた歌は六十五首ある。それを緒方惟精氏⁽³⁾の論を参考に、私に、分類し表にしたものをあげる。(番号は、『国歌大観』の『万葉集』の歌番号)

・相手が夢に姿をあらわす

卷四 九首(五八一、六二一、六三三、六三九、七〇五、七二〇、七二六、七二八、七四二)

卷七 二首(一三四五、一三四五)

卷八 一首(一六二〇)

卷九 一首(一七二九)

卷十 一首(二二四一)

卷十一 四首(二五五三、二五六九、二七五四、二七八六)

卷十二 三首(二八四八、二八八〇、二八九〇)

卷十四 一首(三四七一)

卷十五 五首(三六三九、三六四七、三七一四、三七三五、三七三八)

卷十七 四首(三九二九、三九七八、三九八〇、三九八一)

・相手が夢にあらわれることを願う

卷四 六首（六一五、七四四、七四九、七六七、七七二、七八四）

卷十一 九首（二四一二、二四一八、二四七九、二五〇一、二五四四、二五八七、二五八九、二五九五、二六三四）

卷十二 七首（二八四二、二八五〇、二九五七、二九五八、二九五九、三一二〇、三二四二）

卷十三 三首（三二八〇、三二八一、三二八三）

・相手を夢にみられないことを嘆く

卷十一 二首（二八一四、二八一五）

『万葉集』の夢は、右の表に示したように「相手が夢に姿をあらわす」という形に詠まれた「夢」は、三十八首、「相手が夢にあらわれることを願う」という形で詠まれた「夢」が、二十五首、「相手を夢にみられないことを嘆く」という形で詠まれた「夢」が二首、合計六十五首と、『万葉集』中九十八首ある「夢」歌中、じつに六十五首（約六十六％）が「恋」を詠んでおり、「夢」が恋の場で多く詠まれていることがわかる。ここで『万葉集』の例を二、三あげると、

五八一 生きてあらば見まくも知らずなにかも死なむよ妹と夢に見えつつ

六一五 我が背子は相思はずともしきたへの君が枕は夢に見えこそ

二八一四 我が恋は慰めかねつま日長く夢に見えずて年の経ぬれば

と『万葉集』の「夢」の歌は、恋愛の相手の姿を夢に見たとか、旅に出ていて、故郷に残した妻の姿を夢に見たというように、広い意味で恋愛の歌がほとんどであるといえる。和歌という私的な感情の記録である『万葉集』は、大部分が愛人とか、家族、友人とかと愛情の交換をした記録であるために、愛する人の姿が「夢」の中に出て来、また「夢」の中に見えることを求めるようになるという、そうした形で和歌の中に詠まれていた。また、『万葉集』の「夢」は現実に対しての

もう一つの現実、いはば「現実ではない現実」として、例えば五八一の歌「死なむよ妹と夢に見えつつ」や二八一四の「ま日長く夢に見えずて年の経ぬれば」のように、現実に対してのもう一つの現実として存在していた。

四 八代集にみる夢

つぎに「八代集」の「夢」についても考察することとする。「八代集」の「夢」歌を部立によって分けた表を挙げる。「八代集」の部立によって「夢」歌を分け、「夢」がどのような場に詠まれていたのか、以下表とともに考察していく。

部立歌集												
春歌	夏歌	秋歌	冬歌	物名歌	恋歌	雑歌	哀傷歌	別離歌	羈旅歌	神祇歌	釈教歌	
1	0	0	0	1	19	3	3	0	0	なし	なし	古今集
1	3	0	0	なし	18	1	4	0	0	なし	なし	後撰集
0	0	0	0	なし	16	4	3	1	0	なし	なし	拾遺集
2	0	0	0	なし	7	4	3	0	0	なし	なし	後拾遺集
0	0	1	0	なし	7	4	なし	0	なし	なし	なし	二度金葉集 三奏
0	0	1	0	なし	7	3	なし	0	0	なし	なし	
0	1	0	0	なし	2	2	なし	0	なし	なし	なし	詞花集
1	2	0	2	なし	12	12	3	なし	3	0	4	千載集
3	4	4	5	なし	28	12	9	なし	5	2	3	新古今集

『古今集』の中で詠まれている「夢」は全体で二十七首、そのうち「恋」の部立で詠まれている歌は十九首と、約七十%を占め、『後撰集』の中で詠まれている「夢」は、二十七首中十八首が「恋」の部立で詠まれており約七十%を占めている。『拾遺集』では、二十四首中十六首が「恋」の部立で詠まれており約四十%、『金葉集』（二度本）では、十三首中七首、約四十%、（三奏本）では、十二首中、七首、『詞花集』では五首中、二首、『千載集』では、三十九首中、十二首と約三十五%、『新古今集』では七十五首中、二十八首と約三十五%、と「八代集」中でも「夢」は、『万葉集』と同様に恋の中で詠まれることが多い。このことから「八代集」の「夢」もまた、『万葉集』の「夢」の詠みぶりを踏襲しているように考えられる。ただ、『千載和歌集』、『新古今和歌集』の時代と三代集の時代を比べると、「夢」が「恋」に詠まれる割合が半減してくる。その減少した分「夢」は春、夏、秋、冬といった四季の部立に、また、『千載和歌集』から新しく登場してくる「釈教」の部立に登場しはじめ、「恋」という愛情表現の場だけでなく「夢」が新しい場で新しい用法で使われはじめている。また、「夢」のとらえ方も

うたゝねに恋しき人を見てしより夢てふ物は頼みそめてき

（古今和歌集、恋二、小野小町、五五三）

夢よりもはかなきものは陽炎のほのかに見えし影にぞありける

（拾遺和歌集、恋二、よみ人知らず、七三三）

秋ふかき寝覚めにいかゞ思ひいづるはかなく見えし春の夜の夢

（新古今和歌集、哀傷、殷富門院大輔、七九〇）

のように「夢てふ物は頼みそめてき」、「夢よりもはかなきものは」、「はかなく見えし春の夜の夢」と、『万葉集』では「現実」に対してのもう一つの現実」として存在していたが、八代集の夢は「現実」というよりは消えてなくなる「はかない」、また、「淡い」存在として変化しつつある。式子内親王が活躍した千載、新古今の時代の「夢」は伝統を踏襲しつつも新しい場で、新しい存在で詠まれ始める、まさに伝統と革新の「夢」の時代であったのである。

五 式子内親王の夢

「夢」の存在意義が変わりはじめた時代の中にいた式子内親王であるが、式子内親王の詠んだ歌は、左の表に示したように「前斎院御百首」歌、「百首」歌、「正治百首」、「雖入勅撰不見家集歌」の三百六十七首からなる『式子内親王集』と、『式子内親王集』に見えない「勅撰集」歌五首、「三百六十番歌合」に見える十七首、「玄玉集」に見える二首、「雲葉集」の二首、「夫木和歌集」の一首、「万代集」の一首、「定家小本」の一首、「長秋草」の十一首、合計四百七首の歌が現在確認されている。⁽⁴⁾

式子内親王歌

① 『式子内親王集』 三百六十七首	④ 玄玉集 二首
・ 前斎院御百首 (春、夏、秋、冬、恋、雑)	⑤ 雲葉集 二首
・ 百首 (春、夏、秋、冬、恋、雑)	⑥ 夫木和歌抄 一首
・ 正治百首 (春、夏、秋、冬、恋、旅、山家、鳥、祝)	⑦ 万代集 一首
・ 雖入勅撰不見家集歌	⑧ 定家小本 一首
② 「勅撰集」歌 五首	⑨ 長秋草 十一首
③ 三百六十番歌合 十七首	合計 四百七首

四百七首の中で式子内親王が「夢」を詠んだ歌は、冒頭に述べたように、十七首ある。「夢」は、万葉、八代集と「恋」、「愛情」を詠む素材とされてきた言葉であるから、「忍ぶる恋」の歌人として有名な式子内親王であるならさぞかし「夢」を多く詠んでいるであろうと想像していたが、以外にすくなくことがわかる。では、式子の夢が部立によってどういった

分布状況を示しているか。式子内親王の夢歌の部立による歌数を見ると、春歌・三首、夏歌・三首、秋歌・一首、冬歌・一首、恋歌・五首、雑歌・一首、釈教歌・一首、その他・二首である。『万葉集』『八代集』同様に式子内親王歌においても、いずれも「夢」は恋の歌で多く詠まれる傾向にあるようである。しかし、式子内親王歌においては、「夢」が恋で詠まれている割合は、十七首中、五首、約三十%と八代集中「夢」が恋で詠まれた割合が最も少なかった『千載集』、『新古今集』の三十五%を下回り、その分、春、夏、秋、冬の四季の歌の方で八首、約四十七%と「恋歌」以上に「夢」を四季に寄せて詠んでいる。ここに式子内親王の特徴が見えるのである。こうした数字は、勅撰和歌集である「八代集」と私家集である『式子内親王集』とでは、歌集としての性質の違い、さらには各部の歌数も異なるものである。「八代集」の中には、式子内親王の歌も含まれているものであるが、一応歌数全体から見たそれぞれの「夢」歌の特徴は今まで示してきたようなことが言えるのではないか。

次に、式子内親王の歌については、『平安鎌倉私家集』（久松潜一、国島章江氏校注、日本古典文学大系、昭和三九、九、岩波書店）錦仁氏編『式子内親王全歌集—改訂版—』（昭和六二、三、桜楓社）小田剛氏『式子内親王全歌注釈』（一九九五、一二、和泉書院）の中ですでに指摘されているが、具体的に「夢」についてみていく。（式子内親王歌本文は、益田勝実氏蔵『式子内親王歌』第一底本により、その他は『新編国歌大観』によった。）

① たのむ哉まだ見ぬ人を思ひねのほのかになるゝよひくの夢（前斎院御百首 恋）

（参考歌）

うたゝねに恋しき人をみてしより夢てふ物は頼みそめてき（古今和歌集 小町 恋二、五五三）

よひよひの夢のたましひあしたゆく有りてもまたんとぶらひにこよ（小町集 二九）

この歌は「前斎院御百首・恋」に入集している歌である。一首の意は「身を任せることだなあ。まだ見ぬ人を思い寝のう

ちにぼんやりと寝入りはじめた宵々の夢であるよ」となるこの歌は、前掲の参考歌の二首の小町歌から影響を受けたものである。小町歌は、現実には逢えない恋人とせめて夢のなかでも逢いたいと恋人に対して訴えているが、式子内親王の歌は「まだみぬ人」を想う、恋に恋をする人の夢として詠んでいる。恋する人を夢の中でだけ考えている恋の初期段階を詠んだ歌になっている。ここからは、どうしても恋を成就させたい。命に代えてもという「玉の緒よ…」の歌に現れている悲壮感は微塵も感じられない。夢の中で恋しい人に逢うという構図は、万葉、古今以来数多く見える詠でもある。この歌は、そうした伝統を踏襲して詠んだ歌であるように考えられる。決して自分の心から詠んだものではない「夢」がそこには、存在している。

② つかのまのやみのうつゝもまだしらぬ夢より夢に迷ぬる哉 (前斎院御百首 恋)

(参考歌)

むばたまのやみのうつゝはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり (古今和歌集 読人知らず 恋三 六四七)
くらきよりくらき道にぞ入りぬべきはるかにてらせ山のはの月 (和泉式部集 一五〇)

この歌も「前斎院御百首・恋」に入集している歌である。一首の意は「はかない闇の中の逢瀬さえも知らず夢から夢に私は迷っていたことであるよ」となる。この歌は、前掲の『古今集』、読人知らず歌。和泉式部歌の影響をうけている。参考歌二首は、恋の終わりを暗示させるような悲壮感があり、切実な願いとして詠んでいる。しかし、この歌は、「やみのうつゝもまだしらぬ」と恋をしたことのない女性が恋をする情景を詠んでいる。参考歌二首のような現実的な重苦しい感じはなくなっている。しかし、現実の恋に対して憧れる部分は感じられるものの、前歌同様にこの歌からも式子内親王に代表される恋に対しての情熱は感じられない歌となっている。ただ夢から夢にと現実世界とは別の世界を想い空想しているという感じがしてならない。「夢」は、現実世界に対してのもう一つの現実として存在し、別な世界から現実世界に憧れると

いう構図になっている。この歌も万葉、古今以来の伝統を踏襲している「夢」の歌であるように考えられる。

- ③ はじめなき夢を夢ともしらずしてこのをはりをやさめはてぬべき (前斎院御百首 雑)

(参考歌)

ながき世にまよふやみぢのいつさめて夢を夢とおもひあはせん (風雅和歌集、從二位為子、雑下、一九〇八)

この歌は「前斎院御百首歌・雑」に入集している歌である。一首の意は「始めもなく、また、終わりもない夢ともわからずにこの命が終わってしまうまでは、夢は覚めやらす終わらないのであろうか」となる。雑歌ではあるが、仏教色の強い歌となっている。「はじめなき夢」と前一首の恋歌にはないほどに切実に自分の心を歌に託している。この歌の影響を受けたのであろうか、前掲の参考歌『風雅集』為子と詠みぶりが似ている。夢を釈教的に歌に使われるようになるのは、千載、新古今時代からである。また、この歌には、前時代からの影響を受けた歌は、今のところ見あたらない、いかにも新古今的で式子内親王らしい歌である。

- ④ み山べのそこともしらぬ旅枕うつゝとも夢もかほる春哉 (百首歌 春)

(参考歌)

宿りして春の山辺にねたる夜は夢の内にも花ぞちりける (古今和歌集、貫之、春下、一二七)

思ふどち春の山辺にうちむれてそこともいはぬ旅ねしてしが (古今和歌集、素性、春下、一二六)

この歌は「百首歌 春」に入集している歌である。一首の意は「深山辺のどこともわからない場所に旅寝して、起きるときも夢の中も同じようにかおるようなほのかな春を身に心に感じている」となる。現実に対しての夢を詠んでいる。この歌は、前掲の『古今集』、貫之、素性歌のかなり影響を受けて、歌の構図自体は、それほど変化はない。しかし、この歌は、参考歌と比べて、現実も夢も花によって薫るという、いかにも華やかで新古今的な歌である。また、現実に対して

のもう一つの現実「夢」という構図はいかにも万葉、三代集の伝統を受け継ぐものである。華やかなものの中に、古の「夢」を用いて調和させている。

- ⑤ 待ゝて夢かうつゝかほとゝぎすたゞ一声の明ぼのゝ空 (百首歌 夏)

(参考歌)

ほととぎす夢かうつつか朝露のおきて別れし暁の声 (古今和歌集、読人知らず、恋三、六四一)

この歌は「百首歌・夏」に入集している歌である。一首の意は「今か今かと待ちに待って曙の空について聞いたほととぎすの一声は夢なのか現実なのかわからない」となる。この歌は、前掲の『古今集』、読人知らず歌の影響を受けている。ほととぎすの声は現実も夢をも惑わせると新鮮で流麗な表現はいかにも新古今的のものである。また、参考歌は後朝の別れを詠んだものであり、この歌も参考歌により恋の余韻をかなり潜ませているものと考えられる。ここでも現に対して「夢」が詠まれている。「夢」は現実と夢と認識すらできないはかないもの短いものとして詠んでいる。夏歌に恋のイメージを持ち込むことにより一層華やかにしている。

- ⑥ 袖の上にかきねの梅はをとづれて枕にきゆるうたゝねの夢 (正治百首 春)

(新後拾遺和歌集、春上、五一)

(参考歌)

わがやどのかきねの梅のうつりがひとりねもせぬこゝちこそすれ (後拾遺和歌集 読人知らず 春上 五五)

この歌は「正治百首・春」に入集している歌である。一首の意は「袖の上に垣根の梅の香がうつり匂ってしまった、そして、梅の香の訪れによって目覚め、はかなくも消えていったうたたねの夢であるよ」となる。「夢」を持ち込むことによって現実も夢も花(梅)によって薫という華やかで、新古今的な発想となっている。この歌は、前掲の『後拾遺集』、読人知

らず歌の影響を受けたものである。参考歌は、春の部立に入っているものであるが、「うつりがにひとりねもせぬ」と後朝の恋を匂わせる表現があり、この歌も「うつりがにひとりねもせぬ」と詠まれ後朝の恋を匂わせている。「夢」は、はかない、うつろいやすいものとして詠まれ、恋を匂わせることにより、この歌を華やかにしている。

⑦ 夢のうちもうつろふ花に風吹てしづ心なき春のうたゝね (正治百首 春)

(本歌)

久方の光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ (古今和歌集、紀友則、春下、八四)

(参考歌)

宿りして春の山辺にねたる夜は夢のうちにも花ぞちりける (古今和歌集、紀貫之、春下、一一七)

寝もやすく寝られざりけり春の夜は花の散るのみ夢に見えつつ (新古今和歌集、躬恒、春下、一〇六)

あくといへばしづ心なき春の夜の夢とや君を夜のみは見ん (新古今和歌集、大納言清蔭、恋三、一一七七)

思ひ寝の夢路に匂ふ花をさへしばしも見せぬ風の音かな (続古今和歌集、忠良、春下、一四八)

この歌は「正治百首・春」に入集している歌である。一首の意は「現実だけではなく夢の中でさえもうつろいやすい夢のように色あせてゆく花が風に吹かれておちつかない春のうたたねであるよ」となる。この歌は、前掲の『古今集』、紀友則を本歌にして詠まれたものである。また、参考歌に、『古今集』貫之歌、『新古今集』躬恒、清蔭歌、『続古今集』忠良歌があげられる。全体的に歌は、参考歌二首同様、平明な叙情的な歌で古今調である。「夢」も現実のうちにも「夢」のうちにも花がうつろうというように、はかない、消えやすい「夢」となっている。「夢」と「花」が効果的に使われている。

⑧ かへりこむ昔を今と思ひねの夢の枕にゝほふたち花 (正治百首 夏)

(新古今和歌集、夏、二四〇)

(参考歌)

いにしへのしづのをだまきくり返しむかしを今になすよしもがな (伊勢物語)

さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞなく (古今和歌集、読人知らず、夏、一三九)

この歌は「正治百首・春」に入集している歌である。一首の意は「もう帰ってくるのではない昔の思い出を今のこのように夢に見ていました。その夢を見ている枕辺に橘の香りが漂っています。」となる。この歌は、前掲の『伊勢物語』、『古今集』、読人知らず歌から影響を受けたものである。現実も夢も橘によって薫という新古今的華やかさをもつ歌である。参考歌の『伊勢物語』の背景を受けて恋の物語的側面、また、古今集の「花橘の香をかげば昔の人の袖」というように夏歌でありながら恋の暗示さえもあるこの二首の歌をうけて、この歌も恋の一面を暗示させている。「夢」は「かへりこむ昔」を懐かしみそれがもどるはずもないことを知っている式子内親王は、決して叶うことのない願い、希望に似たはかないものとして詠んでおり、「夢」で恋を匂わせることによって一層ものの悲しいものとなっている。

式子内親王歌は、正治百首から『新古今集』に二十五首入集している。夢歌はそのうちこの歌と⑩歌の二首が入集している。

⑨ 霰ふる野路のさゝ原ふし侘てさらに都を夢にだに見ず (正治百首 冬)

(続古今和歌集、羈旅、九〇七)

(参考歌)

駿河なる宇津の山辺のうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり (新古今和歌集、業平朝臣、羈旅、九〇四)

この歌は「正治百首・冬」に入集している歌である。一首の意は「霰が降りしきる野路の笹原は侘びしく眠りがたいくて、恋しく思う都でさえも夢に見ることはない」となる。この歌は、前掲の『新古今集』、業平歌の影響を受けたものである。

参考歌は、羈旅的発想を主体に詠まれている。また、『伊勢物語』九段で詠まれている歌である。九段の話を潜ませ、都から遠く離れた駿河の国から都の恋人の薄情さを恨む歌である。この歌も参考歌の影響をうけて羈旅的発想を主体にして、恋を暗示しているものである。「夢」は「夢にだに見ず」とうつろいやすいものとして詠れ、「夢」がいよいよこの歌を切ないものになっている。

⑩ 夢にてもみゆらん物を歎つゝうちぬるよひの袖のけしきは (正治百首 恋)

(新古今和歌集、恋二、一二二四)

(参考歌)

むば玉の夜の夢には見ゆらむや袖ひるまなくわれし恋ふれば (家持集、一二〇)

思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢としりせば覚めざらましを (古今和歌集、小町、恋二、五五二)

うつつにはあふことかたし玉の緒のよるはたえせずゆめに見えなん (拾遺和歌集、人麿、恋三、八〇九)

この歌は「正治百首・恋」に入集している歌である。一首の意は「せめて夢の中にでもあなたに会えるでしょうに、なに嘆き嘆き横になる宵の私の袖の気色は」となる。この歌は、前掲の『万葉集』家持、『古今集』小町、『拾遺集』人麿歌の影響を受けている。この歌は「せめて夢の中だけでも」と激しいものとなっている。こうした発想の歌は参考歌からもわかるように万葉以来の伝統をふまえたものとなっており、「夢」もまた、相手の夢に現れるという発想に基づくもので、伝統をふまえたものである。発想が参考歌から抜け出せていない感がある。

⑪ はかなしや枕さだめぬうたゝねにほのかにまよふ夢の通路 (千載和歌集、恋二、六七七)

(参考歌)

よひよひに枕さだめむ方もなしいか寝し夜か夢に見えけむ (古今和歌集、読人知らず、恋二、五一六)

この歌は『千載集』に入集している歌である。一首の意は「はかない事だなあ、枕の位置も決めず寝たうたた寝の、ほかに迷う夢の通路は、恋人に逢えそうで逢えない頼りないものでしたよ」となる。この歌は前掲の『古今集』、読人知らず歌の影響をうけている。「夢」は「夢の通路」と夢の中で恋人に逢うという伝統をふまえたものとなっている。

- ⑫ 窓ちかき竹の葉すさぶ風の音にいとゞみじかきうたゝねの夢 (新古今和歌集、春宮大夫公継、夏、二五六)

(参考)

風生竹夜窓臥 月照松時台上行 (和漢朗詠集、白楽天 夏「夏夜」一五一)

(参考歌)

窓ちかきいさゝむら竹風ふけば秋におどろく夏の夜の夢 (新古今和歌集、公継、夏、二五七)

この歌は『新古今集』に入集している歌である。一首の意は「窓近の竹の葉に吹きすさぶ風の音によってめざめてしまった、(そうでなくても夏の夜というのは短いのに) 一層と短いうたた寝の夢であるよ」となる。この歌は前掲の『和漢朗詠集』から影響を受けており漢語を取り入れて詠んだものである。「窓」という漢語的で当時としては新しい言葉を用いて詠んでいる。聴覚と視覚そして現と夢を混合した歌である。「夢」は、「いとゞみじかきうたゝねの夢」とはかないものとして詠まれ、夏の夜の短さを強調している形になっている。また、この歌と趣向を同じくするものとして前掲『新古今集』公継歌があげられる。

- ⑬ 千たびうつ砧の音に夢さめて物思ふ袖の露ぞくだくる (新古今和歌集、秋下、四八四)

(参考)

八月九月正長夜 千声万声無了時 (和漢朗詠集、白楽天 秋「擣衣」三四五)

(参考歌)

あは雪のたまればかてに砕けつつわが物思ひのしげころかな（古今和歌集、読人知らず、恋一、五五〇）

この歌は『新古今集』に入集している歌である。一首の意は「何度も何度も限りなく打たれる砧の音によって夢から覚めてしまいました、物思い沈み込み（そこで見たものが悲しいため）袖の涙の露が砕けてしまった」となる。この歌もまた、⑫歌同様に『和漢朗詠集』の歌から影響を受けている漢語を取り入れて詠んだものである。聴覚と視覚、現と夢とが混合されている歌である。また、参考歌の『古今集』読人知らず歌同様に、「物思ふ」とするあたりには、恋を感じさせるところもあるように感じる。「夢」は「夢さめて」とはかないものとして詠まれ、恋の切なさも同様に感じさせ、一層深い悲しみを暗示している。

⑭ しづかなる暁ごとにみわたせばまだふかき夜の夢ぞかなしき（新古今和歌集、釈教、一九六九）

この歌は『新古今集』に入集している歌である。詞書に「百首歌の中に毎日晨朝入諸定の心を」とあり「毎日晨朝入諸定の心を詠んだものである。一首の意は「静かな暁ごとに私は（晨朝入定する地蔵菩薩のように）、禅定に入って、世の中を見渡してみると、衆生が、まだ、無明長夜の深い闇の夢の中をさまよい続けている様子を見ることは悲しいが、私もまた、衆生同様に、静寂の境地に達して、衆生同様に無明長夜の深い闇の夢の中をさまようことの悲しさよ」となる。前掲の詞書「毎日晨朝入諸定」は、『地蔵講式』、『延命地蔵菩薩經』に見える句である。この歌の解し方であるが、『新古今和歌集』（新日本古典文学大系 岩波書店）では、「地蔵菩薩の心を詠んだとする説もある。」とし、久保田淳氏『新古今和歌集全評釈』では、「ここでは地蔵菩薩になりかわって詠んだものと考えておく」としている、また、『完本新古今和歌集全評釈』では「今は自身を省みる意でいっている」としているように、この歌は、式子内親王自身が、地蔵菩薩になりかわって衆生や世の中を詠み、また、地蔵菩薩から自分自身のこと客観的に詠んでいる。ここでの「夢」は、「衆生の無明長夜の闇の夢」と「自身の無明長夜の闇の夢」と「夢」に二重の意味を重ねて、一層せつなく、はかないものとなっている。式

子内親王の気持がよく表れた詠となっている。

- ⑮ ときのまのゆめまぼろしになりにけんひさしくなれしちぎりとおもへど (長秋草)

(参考)

「たづね行まぼろしもがな伝にても魂のありかをそことしるべし」(源氏物語「桐壺」)

この歌は、『長秋草』で詠まれた歌である。一首の意は「いつのまにか夢、幻になってしまったのだなあ、長い間の縁(夫婦)であったとおもっていたのだが…」となる。前掲の『源氏物語』をふまえ、久しく長く慣れた「契り」と思ったのだが、瞬間の夢幻となり果ててしまったのであろうと、一連の歌の最初を歌い出すものである。「夢」はまぼろしと並べて詠まれて、同意の言葉を重ねることにより式子内親王の気持が一層強調されたものとなっている。

- ⑯ いかにせむ夢路にだにも行やらぬむなしき床の手枕の袖 (新勅撰和歌集、恋五、九七三)

(参考歌)

行きやらぬ夢地をたのむ袂には天つ空なる露やをくらん (伊勢物語 五十四段)

行きやらぬ夢ちにまどふ袂にはあまつそらなき露ぞおきける (後撰和歌集、読人知らず、恋一、五五九)

この歌は『新勅撰集』に入集している歌である。一首の意は「どうしたらいいのだろう。あの人と逢うための夢路でさえも見えなくなってしまう。一人寝の寂しい床の手枕の袖であるよ」となる。前掲の『伊勢物語』、『後撰集』読人知らず歌をふまえて詠んでいる。

参考歌同様に恋人を夢に見られないことを嘆く歌である。「夢」の詠まれ方は伝統をふまえたものである。

- ⑰ いまはただねられぬいをやなげくらんゆめぢばかりにきみをたどりて (長秋草)

(参考歌)

今はただ寝られぬ寝をぞ友にする恋しき人のゆかりと思へば（金葉和歌集、宣源、恋上、三七九）

夢ならでまたもあふべき君ならばねられぬ寝をもなげかざらまし（詞花和歌集、藤原相如、雑下、三九四）

この歌は『長秋草』で詠まれた歌である。一首の意は「いまはただ寝られないためにその寝を嘆くのであらう。夢の中で恋人の許に行くための道をたどり、あなたに逢いたいために」となる。前掲の『金葉集』宣源、『詞花集』相如歌から影響を受けている。「夢」は夢の中で恋人の許に行きたいという古今的な夢となっている。

以上十七首が式子内親王の「夢」歌である。恋歌に見られる式子の「夢」は、①、②、⑩、⑪、⑬の五首である。これらに共通するのは、「まだみぬ人」を宵の「夢」に見る。また、「夢よりゆめにまよひぬる」、「夢にてもみゆらむ」「ほのかにまよふ夢のかよひぢ」「夢路にだにも行きやらぬ」のように、いずれも万葉、三代集の伝統を踏まえた、夢の中で恋人のもとに行きたい。夢の中で恋人に逢うというものであった。また、これらの歌は、参考歌としてあげた歌からの影響も大きく、式子内親王自身みずからの言葉で詠んでいる歌はなかった。ただ参考歌によって形式的に恋の「夢」を詠んでいたのである。現実性のない恋で恋を心の底から詠んだものではなかった。それが式子内親王の「夢」の歌に顕著にみられた。また、式子内親王の夢歌を部立によって分類した際に「その他」に入る『長秋草』の詠二首も恋歌同様に源氏物語を踏まえ、また、「夢ならで」の歌を参考に、それになぞらえて詠んだものである。

しかし、四季に詠まれた式子内親王の「夢」は恋のそれとは違っていた。四季の歌は、④、⑤、⑥、⑦、⑧の八首である。春歌が「み山辺の春」、「梅」、「桜」、夏歌が「時鳥」、「橘」、「竹」、秋歌が「砧」、冬歌が「霰」と季節の歌材に「夢」を託し歌に詠んでいる。本来「夢」は愛情表現に使われた、故に「夢」の対象となるのは人であったにもかかわらず、季節の歌材を対象に「夢」が詠みだされる。その傾向が強くなるのは、前に「四 八代集にみる夢」で触れたが、千載、新古今

時代からである。こうした新しい傾向を式子内親王は、いち早く取り入れ自分の言葉で歌を詠んでいるのである。そこでは、季節の歌材に託し参考歌であげた歌から、そして、『伊勢物語』『和漢朗詠集』からと恋を匂わせ恋を暗示し、歌を華やかにしている。恋歌以上に奥深いものがそこには潜んでいた。自分の想いを表にださずに胸の内に秘め、恋を四季の中に拡散させていく、そうすることによってより深いものを表現しようとした。それは、いかにも新古今的であり、「忍ぶる」歌人式子内親王的表現である。「夢」のもっている曖昧で淡いイメージと、恋を連想させる伝統的イメージとをみごとに調和させ詠み込んでいる。『新古今集』四季の歌中、「夢」が詠まれているのは十六首あったが、その内の三首が式子であり、四首の慈円について二番目の位置にいるのも、式子が四季の中で秀歌を詠んだ結果である。また、そうした秀歌によって、式子が「夢」における新しい傾向、新古今調を作り出したと考えてもいいのではないか。

また、式子内親王は、恋、四季の外に釈教という、『千載集』から新しく出てくる部立の中にも一首⑭の歌を詠んでいる。式子内親王はの中で、「深き夜の夢ぞかなしき」と詠み、「まだ深き夜」という抽象的な言葉を「夢」という淡い、曖昧な言葉で、その内容を「衆生の無明長夜の闇の夢」と「自身の無明長夜の闇の夢」というように「夢」を二重に用いて強調している。また、釈教的歌として③があったが、ここでも「はじめなき夢を夢とも」とし、「夢」を重ねて強調し、⑭歌と同様に用いていた。

六

式子内親王の「夢」を見ていった結果、「恋歌」の中で詠まれた歌は、歌全体の構図、発想が、三代集時代を中心とした参考歌とほぼ同じようにふまえられており、式子内親王らしさがでていなかった。それは、「夢」という概念が恋というものに結びつき定着してしまった結果であるように思われる。ゆえに、伝統に縛られ、当時の概念にとらわれすぎて、式子

内親王の心情とは別に現実離れをした形式的な「恋」を詠んだにすぎなかったのである。

しかし、四季の歌になると「夢」を四季の歌材に託し、本歌、参考歌としてあげた万葉、三代集時代の歌の構図、発想を借りて新しい「夢」を詠もうとしていた。それは、「夢」恋」と定着していた「夢」の世界を春、夏、秋、冬の四季の歌材に託し恋を匂わせることにより四季の世界を一層華やかにするねらいが式子内親王自身にあったのである。伝統的な歌と、曖昧で淡いイメージの「夢」の融合、それは、恋歌以上に奥が深く秘めた美しさ、また、同時に華やかさを歌の中に生み出していた。固定化し、定着しつつあった「夢」に新しい場を与えた。故に「夢」は、式子内親王の十七首と数は少ないが歌の読み手に強い印象を与えるのである。

また、釈教歌の中でも、四季歌同様に「夢」を詠み込むことによって悲壮感を一層増長させ、印象深くさせる。「夢」が恋と結びついているからそれは一層深い意味をもつのである。

式子内親王にとっての「夢」は、結局、恋そのものであった。しかし、その「夢」という言葉がもつ恋というイメージまた、曖昧さ、はかなさというものを恋の場面に詠み込むのではなく、四季、釈教と他の場面に持ち込むことによって、歌を一層華やかに、また、強調することによって読み手に強い印象を与えていたのである。恋ではない夢の中に、恋を忍ばせ歌を強調する。それが「忍ぶる恋」の歌人式子内親王の「夢」であり「夢」歌の特徴であった。

〔注〕

- (1) 久松潜一、實方清氏編『日本歌人講座 中世の歌人Ⅱ』（一九六八、一二、弘文堂）、馬場あき子氏『式子内親王』（一九六九、紀伊国屋書店）、久保田淳氏『中世文学の世界』（一九七二、東京大学出版会）、石丸晶子氏『式子内親王伝』（一九八九、一二、朝日新聞社）久富木原玲氏「花の歌、夢の歌」（『鹿児島女子短期大学紀要』第二六号一九九〇）錦仁氏『中世和歌の研究』（平成三年、一〇月、桜楓社）糸賀きみ江氏「式子内親王——生涯と表現——」（『新古今集 和歌文学講座6』平成六年、一月、勉誠

社)に式子内親王の特徴的な言葉が指摘されている。また、式子内親王の夢歌については、松井律子氏「式子内親王の夢の歌の位相」(『就実論叢』第五号、昭和五〇年、一二)小森智恵美氏「式子内親王集の研究——「夢」の歌を中心として——」(『国語国文論集』第一三号、昭和五九年、六)の中で指摘されている。

(2) 糸賀きみ江氏「式子内親王——生涯と表現——」(『新古今集 和歌文学講座6』平成六年、一月、勉誠社)兼築信行氏「式子内親王の生年と『定家小本』」(『和歌文学研究彙報 三号』一九九四、七、一)石川泰水氏「式子内親王への視点」(『国文学解釈と教材の研究』平成九年、一月、学燈社)などに指摘されている。

(3) 緒方惟精氏「古代文学に描かれたる夢」(『千葉大学 文化科学紀要』昭和四〇年一〇月)

(4) 小田剛氏「式子内親王全注釈」(一九九五、一二、一、和泉書院)による。

(5) 久保田淳氏「中世文学の世界」(一九七二、三、東京大学出版会)石原清志氏「釈教歌の研究——八代集を中心として——」(一九八五、八、同朋出版)を参考にした。

本稿は、平成九年七月五日、二松学舎大学人文学会、第七十五回大会において発表したものである。